実践報告

体験的コミュニティ・ワーク考
―子育て支援活動づくりから―

Experienced Community Work
:Program Planning and Resource Development of a Child Care

平　岡　早　苗
Sanae HIRAOKA

はじめに

このところ押し進められている市町村合併によって地域行政の効率化が進められる中で、福祉サービスの低下は各地で懸念されるところである。

筆者の住むM町も平成20年３月に近隣市町と合併し、市に統合される予定である。同町の社会福祉協議会に勤めていた筆者は、合併にあたって、福祉サービス利用者からもボランティアからも、合併後を心配する声をよく耳にした。福祉サービスの低下を懸念すると、みな口をそろえて「今の日本の政治は…」「議員は…」「役場は…」と既存の行政組織に対して不満を漏らす。しかし、組織もまた「人」であり、ではその「人」を選んだのは誰なのか。本当に現状での福祉サービスは不足しているのか。また逆に、どういう条件がそろえば、この時代の地域生活がさほど悪くないと感じながら暮らしていけるのかという点で、個人的な問題意識をもっている。

筆者自身は、その答えは「地域力」ではないかと思っている。「地域」が元気なところというのは、人が元気だ。支える側の人が元気だと、支えられる側も元気になる。そしてその立場は決して固定したものではなく、「支える側」「支えられる側」のどちらの立場にもなりうると思うのである。お互いに支え合いながら形成されている地域というのは活気もあり、少しぐらいの課題が生じても、住民の手である程度克服してきた。その力こそ「地域力」なのだと思う。

人手不足から、社会福祉協議会の中での筆者の役割はかなり多岐に渡っていた。その中でボランティア・コーディネーターとしてのボランティア（地域の住民）とのかかわり、子育て支援の中での比較的若い年代層とのかかわりは、筆者に様々な視点を持たせ、福祉サービスの提供のあり方について考えさせてくれた。その中で一番重要に感じた「地域力」について、経験の中から述べていきたい。

１．M町の概況と福祉課題

１）M町の概況

M町は県中央部に位置し、面積は129.43平方キロメートルで南北に長い。人口は5,898人、世帯数2,152の町である。高齢化率は33％で、独居高齢者は193人、高齢者の２人暮らしの世帯も多い。手帳取得をもとにした障害者の数は、１級～６級まで514人いる（ただし、精神障害者福祉手帳は含まず）。子どもの出生率は低下の一途をたどっており、年に40人程度が出生する程度であったが、平成18年度は31人にまで減少した。大きな地場産業はなく、就労者はほとんど町外へ出ている。

２）M町の福祉状況

M町はまさに少子高齢化の町であり福祉ニーズも高いため、高齢者分野での施設・サービスが比較的早くから充実している。町内の主だった施設は、総合病院（１）療養型病棟併設、特別養護老人ホーム（１）デイサービス併設、認知症グルー

表１　M町ならびに合併する市町における高齢者関連の社会資源状況

高齢者関連の社会資源	M町	合併するM市	合併するＳ町
高齢者数（率）	1,918人（33%） H19.10.1現在	5,218人（29%） H17.10.1現在	2,107人（35 %） H19.12.1現在
総合病院	１（S町と共立）	１（市立）	１（M町と共立）
老人保健施設	−	1	−
療養型病棟（併設）	２（１つはＳ町と共立）	1	１（M町と共立）
特別養護老人ホーム	1	2	1
養護老人ホーム	−	1	−
認知症グループホーム	1	1	−
精神科病院	1	−	−
デイケア	1	2	−
デイサービス	3	4	2
地域包括センター	１（行政）	１（行政）	１（法人）
居宅介護事業所	2	10	2
訪問介護事業所	2	6	1
訪問看護	1	1	1

表２　M町ならびに合併する社会福祉協議会活動（高齢者分野）

社協の高齢者事業	M町	合併するM市	合併するＳ町
シルバーいきいき ふれあいサロン	21か所	40か所	21か所
ふれあい型 給食サービス	年33回（有料） 対象70 ～ 80人	月１回（O地区のみ） 対象30 ～ 40人	年６回（無料） 対象250人
福祉員の見守り体制	福祉の輪づくり運動にて推進		
その他	・友愛訪問（老人クラブ、独居高齢者誕生プレゼント配布） ・はがきメッセージ運動		

プホーム（１）、精神科病院（認知症専門病院）（１）デイケア併設、デイサービスセンター（３）、地域包括センター（１）、居宅介護事業所（２）、訪問介護事業所（２）、訪問看護（１）がある。

ここに挙げた施設数だけで測れるものではないが、来年度合併する市町と比較しても、医療・福祉サービスは決して劣ってはいないと思われる。

社会福祉協議会での取り組みでも、高齢者分野の事業がいち早く充実している。シルバーいきいきふれあいサロン（町内21か所）、ふれあい給食サービス（年33回）、福祉員の見守り体制の整備、独居高齢者への誕生プレゼント配布（友愛訪問）などが挙げられ、かなりの人が関わっている。

障害者福祉のサービスについては、心身障害者福祉作業所が設置されており、平成12年度より社会福祉協議会で運営をおこなってきたが、平成19年度自立支援法施行に伴い「障害者就労継続支援事業Ｂ型」に移行されたところである。精神障害者については、以前は環境保健所支所の保健師を中心に、M郡内の方を対象にデイケアを実施していた。支所の閉鎖に伴い事業の継続が困難となり、隣接し合併予定のM市の作業所が利用されてい

る。ヘルパーの利用なども若干ある。

インフォーマルな部分では点訳・音訳活動や、要約筆記のサークルで、障害者支援をしている場合もある。就学時の障害児については、教育委員会の方で補助員を置くなどの対応をしている。

児童分野においては、保育所が４か所（へき地保育所２か所含）。子育て支援センター１か所、保健師が行う育児相談会は、１歳３か月までの乳幼児を対象に隔月で実施されている。年に２～３回母子保健推進員と合同で行われる「ファミリーの集い」も、対象は３歳児までで親子で参加できる場所、機会が限られていた。この数年で事業も多少増えたものの子育て支援の分野は、他地域と比較してかなり出遅れていると感じていた。

農村部ではまだ３世代の同居などもみられるが、実際には子育て中の親もその親の代もまだ現役で働いていることが多い。また、いわゆる「スープの冷めない距離」の実践か、若い世帯は親世代と同居をせず、町営住宅やアパートに暮らす世帯が少なくない。その結果、町営住宅では子育て中の家庭が多いため、同敷地内の公園では多数の母子がかかわる光景が目にされる。

地理的地域は広いが過疎化が進んでおり、出生率の低下等に伴い自治区の中には子どもが全くいない地域も増えている。行政が人口の定着を目指して数ヶ所の団地が整備され、一時的にはそうした地区に限って世帯数、児童数も増えた。一方で昔からある自治区については、近隣の家を探しても子どもが見あたらないという状況である。農村部では地域で遊ぶ子どもを見かけず、日頃の交通手段はもっぱら自家用車を使用するため、親が送迎をしてしまうと登下校中の子どもを見ることもない。従って、地域の子どもに関する情報が得られにくく、地域の方も住民同士の実情がつかみにくい現象がおきている。

農村部は都市部と比較して、公園自体が少なく、また、そこで遊ぶ親子も見当たらない。近年いわれる「公園デビュー」もできなければ、公園を媒介として形成される子育て友だち、いわゆる「ママ友」も作りにくい環境である。さらに「育児サークル」などの社会的資源も少ないのが実情である。近年、こういった子育て環境に関する町内での地域格差は広がり、むしろ農村部の方が都会よりも子育て家族が抱えている課題は大きいかもしれない。このような状況により、少しでも子育て支援の事業を充実させたい、対象者は少なくてもこの町で子育てをして良かった、子どもたちがこの町で育ってよかったと思える町にしたい。そんな思いで筆者はボランティア・コーディネーターの立場から子育て支援にも取組むこととなった。

２．地域における子育て支援活動

筆者のボランティア・コーディネーターとしての子育て支援に関する取り組みは、まず子どもを年代別に分けてとらえ、それぞれにどう取り組んでいくかを検討することから始めた。そして、小学生ならびに未就園児に焦点を当てた事業の取り組みを考えた。

小学生については、平成12年度に行った「子育て支援講座」と平成14年、保護者を対象に行った「意識調査」を通して、住民のニーズの把握と確認を行った。保護者の中で課題として多く取り上げられていたのは、やはり「学童保育への要望」、ついで「夏休みの居場所づくり」であった。社会的にも問題となっている「登下校中の不審者」も報告されており、子どもたちの安全に不安を訴える保護者が多かった。そこで、それらに焦点を当て、社会福祉協議会で取り組める内容を検討した。

１）「夏休みの居場所づくり」事業

最初に取り組んだのは、「夏休みの居場所づくり」活動である。地元のボランティア連絡協議会に、夏休み期間中に一度、半日程度、自分たちの活動を活かしながら子どもたちと交流してもらえないかを打診した。関係者からは「子守か…」との意見もあり不安だったが、結局７グループが手をあげてくれ、それぞれの特性を活かしながら進めてくれることになった。子どもたちの参加も盛況で、保護者ともに良い感触を得た。グループの負担なども考え、今後の方向性を確認したところ、

表３　居場所づくり参加人数の推移

年　　度	開催回数（予定）	協力団体数	参加延人数	全小学生数
平成13年度	7回（ 7回）	11団体	192人	315人
平成14年度	14回（14回）	17団体	258人	315人
平成15年度	11回（12回）	13団体	231人	320人
平成16年度	13回（14回）	19団体	441人	328人
平成17年度	16回（16回）	19団体	629人	348人
平成18年度	15回（16回）	19団体	615人	341人
平成19年度	11回（11回）	12団体	357人	326人

その後も協力してくださることになり、平成19年度まで継続して実施している。

活動展開の工夫としては、初年度から全日程終了後協力団体を集めて反省会を行い、運営上の気づきや反省点を整理するとともに団体同士の情報交換の場としたこと。また、活動報告のために、各小学校に写真をたくさん取り込んだ掲示物を貼ったり、「ボランティアだより」などで町民にも周知したりしたことがあげられる。ボランティアにとっての効果は、他のグループのやり方を真似たり、時間が余ってしまったところなどは相互に連携して行ったりされたことがあげられる。子どもたちには、掲示物や「ボランティアだより」によって自分たちが参加できなかった内容について知ることができるほか、自分の写真がそれらに載っていること自体が喜ばれていた。写真が載るということは小学生に限ったことではなく、ボランティアにも喜ばれていた。また、広報誌を活用することで広く町民にも事業内容を知ってもらえるだけでなく、活動が認知されボランティア自身のモチベーションを高めることにもつながったといえる。これらの相乗効果により、子どもの参加と協力者の確保につながったと思っている。

おもな事業評価は以下の通りである。

まず良かった点であるが、小学生とボランティアの異世代間の交流ができたことがあげられる。M町の地域特性と相まって、協力していただいたボランティアの年齢層はかなり高くなっている。ボランティア・グループの中には、活動発足から同メンバーで継続何十年という方もおられる。小学生からみてボランティアの人々は、親世代、祖父母世代、あるいはもっとその上の高齢者世代など様々であった。

更に、小学生にとってお兄ちゃん、お姉ちゃんの世代が入り込んだこともこの事業の良かった点である。これは、平成15年度くらいから個人ボランティアが中学生を巻き込んで野球教室を行ったのだが、その時に参加した小学生が中学生になり、部活動を決めるきっかけにもなった。最初は参加者であった小学生が何年か後には中学生となり、今度は指導補助者として事業に加わってくれたことは、事業を継続したことで得た貴重な体験である。

また、協力したボランティア・グループそれぞれの活動を活かしたプログラムづくりの方式を採用したので、小学生にも保護者にも、更には住民にも普段のボランティア活動内容を周知させるきっかけづくりとなった。福祉的なグループに限らず、環境、平和に通ずるもの、健康や芸術に触れるものなど様々な人や多彩な内容と関われたことも利点である。

逆に、課題となったことについて挙げたいと思う。

＜子どもの立場からみた課題＞

①参加するだけで、準備などの大変さが伝わっていない

②原則、地域のボランティアの活動主体なので、内容が限られる

③低学年の参加は多いが、高学年の参加は内容によるところが大きい

表４　居場所づくり事業に協力したボランティア・グループ

No	普段の活動	実施内容	年齢層	協力回数
1	絵本の読み聞かせ等様々なジャンルの子育て支援	工作、読み聞かせ、バトミントン等	40代	7
2	独居高齢者の誕生プレゼント配布、救急指導	各地区探険	20 ～ 50代	6
3	朗読ボランティア	ことば遊びやかるた、地元の民話を使って手作り人形劇	60 ～ 80代	6
4	点訳ボランティア	点字で遊ぼう、視覚障害者と交流しよう	30 ～ 80代	2
5	子育て支援、下記地区（No.６～９）の活動の総括	星を観る会	50代	2
6	Ａ地区子育て支援	レク指導、エコアイスづくり	30代	2
7	０地区子育て支援	大型紙芝居、工作、手作りかるた	30 ～ 50代	7
8	Ａｙ地区子育て支援	レクリエーション	20 ～ 30代	6
9	M地区保育所児子育て支援	そうめん流し	20 ～ 30代	1
10	食生活改善のための講習会等の実施	調理実習	60 ～ 70代	6
11	母子保健の推進	銭太鼓、洞窟探検等	30 ～ 60代	2
12	子ども主体で情報収集、子育て情報案内企画支援	工作、実験等	40代	4
13	パソコン指導	工作実験等	40代	5
14	給食サービス	そうめん流し	70代	1
15	老人クラブ	そうめん流し設置	70代	1
16	生協活動の一環でのエコ活動、平和活動	絵手紙、エコクッキング	40代	3
17	お菓子づくり	お菓子づくり	30代	7
18	お菓子づくり、学童保育等への指導	お菓子づくり	60代	7
19	高齢者への押し花小物のプレゼント、地域こども教室への支援	押し花を使った小物づくり	40 ～ 70代	7
20	（個）紙芝居	紙芝居、パネルシアター、風船	80代	6
21	（個）中学生への野球指導	中学校野球部と協働で野球教室	10 ～ 40代	5
22	中学校吹奏楽部	楽器に触れよう、演奏しよう	10 ～ 40代	3
23	子育て支援、読み聞かせ、布の絵本作成、おもちゃとのかかわりの推進	陶芸教室、絵画教室	30 ～ 40代	3
24	子ども会活動支援	レクリエーション	10代	5
25	竹細工、地元小学生等へ伝承行事等の協力	竹細工教室	70 ～ 80代	1
26	銭太鼓	銭太鼓	60代	1
※	JAちゃぐりん 交通安全パトロール隊	※共催の形で実施		各１

④他の地区への参加が難しい（小学校区ごとの開催）

⑤毎年同じ内容のものはマンネリ化してしまい、参加につながらない

⑥挨拶ができない、参加態度に問題のある場合がある

＜ボランティア（地域）の立場からみた課題＞

①毎年の参加協力で負担を感じるグループもある

②子どもの興味の少ない内容は参加者が少なく、モチベーションの低下につながる

③低学年の参加は多いが、高学年の参加が少ない

④年齢的、条件的に継続できない（グループ員の

高齢化、JLCは学校生活との両立）
⑤内容のマンネリ化
＜事業実施者の立場からみた課題＞
①参加グループ、児童が増えると調整、フォローが難しい
②地域によって参加率が大きく異なる
③低学年の参加は多いが、高学年の参加が少ない
④保護者の感覚への戸惑い
⑤経費の確保

2）学童保育事業

次に学童保育のことについて報告したい。平成14年に小学生の保護者を対象に「子育て支援に関しての意識調査」を実施した。保護者からの「学童保育ニーズ」は高く、行政の動きも相まって、平成15年度から社会福祉協議会に事業委託されるかたちで実施に至っている。

社会福祉協議会の特性を活かして、嘱託の指導員と運営スタッフには「有償ボランティア」を起用した。実際の活動にも積極的に地域のボランティアに加わってもらっている。定員は概ね30人、町内全域の小学校１年生～３年生を対象。町の庁舎が集まるO地区に開設。開所時間は下校～18時、長期休みや代休などは８時30分～18時。

しかし、蓋を開けてみると、初年度の実際の利用者数は15人程度しかなかった。またその後の利用者も定員を切っており、「ニーズ調査で要望されるニーズ」と「実際に必要とされているニーズ」とに差があることを認識した。

町の最南部に位置するM地区では、公民館主催で文部科学省の「放課後子どもプラン」の事業を実施し、ほとんどボランティアで学童保育と同様のことを行っている。同地区の住民はそちらを利用される。これに継いで、Ay地区でも不定期だが「地域子ども教室」（公民館主導）が開催されるようになり、地域のボランティアの協力のもとに進められている。この地区では最近、小学校の空き教室で試験的に同様の取り組みをされるボランティアもおられる。ただし、全対象者数からすると利用者数はそれほど多くない。一方で両地区のボランティアからは、保護者のモラルの欠如と、期待されるものへの負担、不満の声も若干聞かれる。地域活動を有効に実施するためには、地域全体のニーズとサービスのバランスや、総合的な見地からの事業間コーディネートが重要であると感じた。

学童保育はO地区に開設されたため、利用者は同学校区の児童に偏り、それぞれの地区公民館の取り組みも相まって、O地区専用の学童保育という印象ができてしまった。また、北部のA地区と南部のAy地区については移動手段が課題となり、学童保育の条件では利用しにくい状況から不満と要望が出た。送迎の実施を検討し予算も確保したが、結局は平行線のまま現在に至っている。

この後も幾度か課題が出てきたが、行政の主管課との調整で終わらぬよう、時間を設け保護者との確認や理解の共有を進めてきた。立場が異なるもの同士、お互いの意見をきちんと伝えたうえでその先の方向性を決めて行きたいと考えての取り組みであった。

3）見守りボランティア

登下校中の「見守りボランティア」は警察主導で５グループ発足したが、筆者自身は直接立ち上げには関わっていない。各グループとの連携も視野に入れていたが実現してはいない。ただ観察者としてみれば、１つのボランティア・グループにおいて、グループの代表者と地元の保護者の間で意識のズレ、温度差が見られたように思う。また、現在の見守り体制には、あまり当事者が関与していないと感じている。

農村部といえども（農村部だからこそともいえるが）、年に何度かは不審者の話があがってくる。地域には、環境的に１人で行動させざるを得ない児童生徒も少なくなく、登下校の安全確保は保護者の大きな関心事のひとつである。しかし、世間一般的に言われる危機管理の感覚はどの保護者にもあるものの、その具体的な実践になると他人任せの部分も否めない。もちろん送迎を自ら行う保護者もいるので一概にはいえないが、地域の一員

として取り組む場の設定は無いに等しい状況である。

現在、見守りボランティアとして活動している方々は、年齢層も高く、早晩世代交代の必要性が出てくるはずである。既に当事者と地域とが、ともに今後の方向性を検討しておく時期にさしかかっていると筆者は感じている。

３．未就園児対象の子育て支援活動

未就園児を対象にするものでは、子育てサロンの推進、ブックスタート事業・フォローアップ事業も行ってきたので、これらのかかわりについても少し触れておきたい。

１）子育てサロン事業

子育てサロンについては、従来社会福祉協議会で実施されてきた「シルバーふれあいいきいきサロン」の実践の中から、子育て中の親にもその形態の地域支援策が必要ではないかと感じて着手したものである。すでに県内でも実施されていたが、その多くはボランティアなどの協力支援者を中心に運営され、利用者はリラックスできる空間へ「お客様」として参加するという形をとっている。筆者は担当者として、あえて自主運営を関係者に訴えたので、正確にいうと「育児サークル」づくり支援の方が近いといって良いのかもしれない。

子育て中の親自身がサロンの運営をしていくことが大変なのは、重々承知である。しかし、自分たちのやりたいことを、メンバーで協力しながら進めていくことに、当事者参加活動の意義があると筆者は感じている。同じ立場にあるもの同士が少しずつ協力することで、個人ができることより少し大きなことが体験できるという場所にしたい。利用者のそれぞれが、存在や役割をもつ仲間として参加してほしいと考えた。もちろん必要に応じて、社会福祉協議会がもてる資源を提供したり、当事者たちが課題にぶつかったときはフォローしたりする準備はできている。

もう一つ筆者がコミュニティ・ワーカーとしてこだわったのは、継続性を必要以上に意識しないことである。現役の当事者から、その子育てグループを卒業した方まで継続して活動の運営に携わってくださることは願ってもないことだが、それぞれのグループの雰囲気というものができあがった後に新しいメンバーを入れて、ボランティア・グループのように組織を継続していくことは難しい。子どもの成長過程にそって日々の育児課題が変わる中で、それぞれの世代、地域、条件に合わせて、子育て支援グループができては消え、消えては生まれるという気軽さで、その時必要なニーズを埋める場になれば良い。そこで何かしらの地域での関わり方を体験し、その後に活かしてもらえることが一番大きな目標だと考えたからだ。

筆者が子育てサロンを進めてから、３つのグループができ、２つが活動をやめた。退職間際１つが立ち上がり、盛況なので２つに分かれる話もでている。このような全体的な循環が地域のどこかで続くことを期待しているが、最近の参加者の傾向として、楽しいことに参加するのは良いが、自分が責任を負いたくない、人の手伝いはするけどリーダーにはなりたくないという人が多くみられる。リーダーとしての可能性を秘めた人材を見つけだすことも、地域コーディネーターには不可欠なことだと感じている。

２）ブックスタート事業

最後に、「ブックスタート事業」について報告したい。「ブックスタート事業」とは、生まれてくるすべての赤ちゃんにはじめての絵本を配る事業である。絵本を読んで聞かせること自体が目的ではなく、そのひとときや家族とのかかわりを大切にすることに重きを置いている。当時のボランティア相談員から情報提供を受け、社会福祉協議会として前向きに検討した結果、取組むことになったものである。子育て支援にかかわりのあるボランティアに声をかけ、近隣の実施地域に視察に行くなど１年の準備期間を経て平成17年３月より実施している。

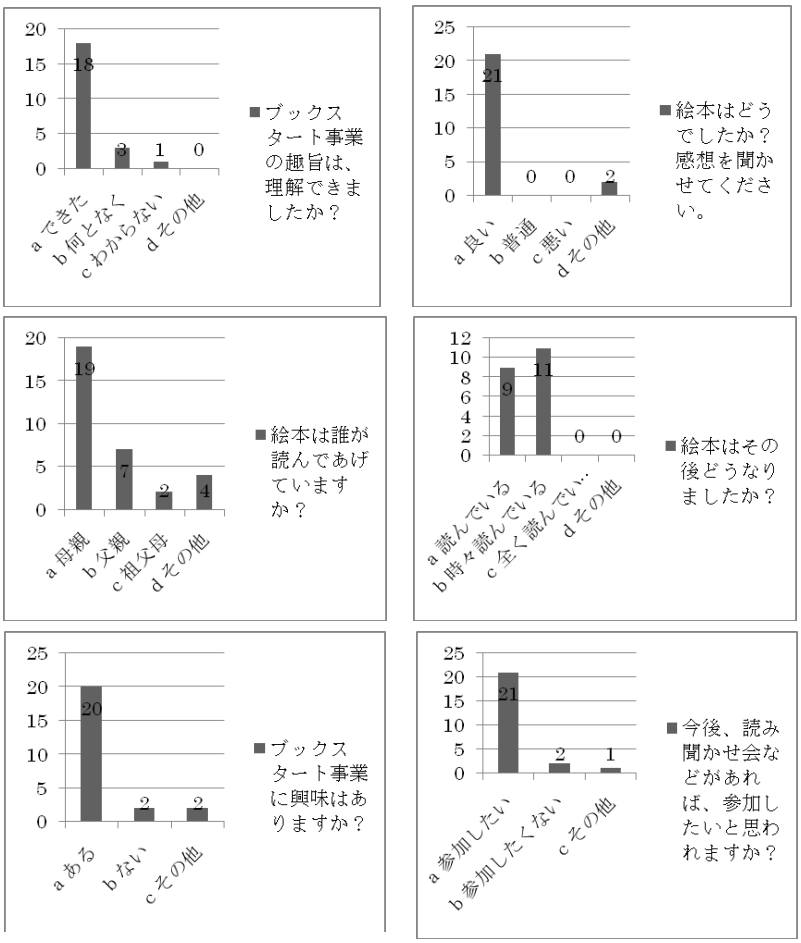
対象はM町内に住所をおく１歳３ヶ月までの乳幼児で、隔月に開催される育児相談会に合わせて

実施している。まずは、ボランティアの手で直接ブックスタートの趣旨を伝え、必ず絵本を読んで手渡す。現在、対象者の８割に手渡すことができている。事業の認知度、育児休暇等の条件から受け取れないことがないように、該当児童が２歳になるまでは、事業について案内をし、絵本の配布方法などは相談に応じている。

１年後に、絵本を配布した対象の保護者（２歳を過ぎて渡せなかった方も含む）にアンケートをとった結果、その絵本を通じて対象の乳幼児と家族のかかわりが持てている方も多かった。「子どもに絵本を読むきっかけになった」「絵本を選ぶ参考になった」「子どもの反応が驚きであった」などの意見が聞かれ、趣旨がある程度まで伝わっていることを確認できた。

また、ただ絵本を配って終わるのでは意味がないということで、年２回のフォローアップ事業も行っている。こちらの参加は制限が無い。子育てサロン事業と似ている面もあるが、絵本の紹介や絵本を組み入れたプログラムを欠かさない点が異なる。育児中の親子が参加できる場所として果たす役割も大きい。

ブックスタートは、町内の全対象者に配ることを原則にしているが、絵本の配布を最長２歳に設定したのは、前述の対象者アンケートの結果による。事業実施後のアンケートの結果では、大概が



グラフ１　ブックスタート事業アンケート結果（29人回答／ 60人送付）

良い評価であったが、逆に「こうした事業に全く興味がない」などの意見も聞かれた。母子保健推進員やスタッフで家庭訪問をすることも検討したが、逆に地域と隔絶してしまうきっかけになることを懸念した。また、スタッフに主任児童委員がいるため、要観察の児童のいる家庭等については絵本の配布を口実に家庭訪問するなど、臨機応変に対応することにした。

ブックスタートは絵本をツールとして、家族と子どもがふれあう時間をもつこと、そうした時間やかかわりの大切さを伝えていくことが事業の目的である。直接的に育児についてふれるというよりは、絵本をとおして子どもの好きなもの、必要なものを感覚の中で受け止められる事業という印象を持っている。フォロー事業の実施で絵本などの情報を提供するだけではなく、育児の感覚への共感や地域の家庭、関係スタッフ等、地域との接点としても機能するものである。地域とのつながりがあり、こうした機会に積極的に参加できる家庭はそれ程問題ない。逆にこうした機会に参加できない、参加する気が無い家庭の方がさまざまな福祉ニーズを抱えていたり、解決するための人との関わりが少なかったりすることも予測される。こういった、福祉的活動に消極的な家庭とどう接点をもつかが今後の課題である。

４．地域力の担い手の変化

以上、筆者が取り組んできた子育て支援事業についての概略を報告したが、その経験をもとに「地域力」との関係で少し考察したい。

子育て支援の事業をすすめるにあたって、当初、私は当事者（子育て中の母親たち）を支えることに主眼をおいていた。まさに「子育て」を支援するべく、事業に取り組んでいたと思う。しかし、事業を展開する中で当事者を積極的に地域に関わらせようと徐々に方向が変わっていった。それは、さまざまな人との関わりが原因であろう。

「子育て支援の事業」の中では、まず当事者（子育て中の母親）そしてその人の子どもと、その家族がいる。子どもといっても、乳幼児、小学生、中学生といくつかの年齢層に分けられる。核家族化しているので、家族員の年齢は比較的若いが、それぞれの事業に関わるスタッフの年齢層は幅広い。０歳児対象の事業に、83歳のボランティアが関わるという具合である。

子育て支援事業に関わるまで、筆者がボランティア・コーディネーターとして担当した仕事は、高齢者層を中心とするボランティア・グループとの関わりが主であった。若い年齢層のボランティアの拡充にも力を注いだつもりであるが、割合としては少なかった。また、ボランティア活動に参加してくる若者たちは、年齢は若いとはいえ、ある程度の意識や関心をもって活動に関わる方たちなので、筆者自身との関わりの上でそれ程大きな違和感はなかったように思う。

それが、「子育て支援事業」となると、前述したように協力者の年齢層が広く、さらに当事者として現役の「子育て世代の人々」も入ってくるため、年齢、風貌、考え方、価値観など、千差万別である。筆者自身が感覚的に古いためか、考え方の違いをまざまざと感じる状況におかれることが多かった。社会の縮図というと大げさだが、これが本来の「地域」のかたちと言えるのかもしれない。しかしながら、筆者にとっては住民との関わり方に改めて戸惑いを覚え、地域活動のあり方について今一度考える機会となったのである。

従来型の、地域でボランティア活動を支える人々の特質としては、一言で言えば「義理人情」という感じだろうか。ボランティア活動を、相手にも自分にも役に立つこととして捉え、「思いやり」や「情」も多くみられたように感じる。元々ある地縁の強さからか、基本的に社会福祉協議会から頼まれれば積極的に協力してくれるという姿勢があった。「婦人会」や「老人クラブ」などはその典型であったと思う。逆にその組織の統制力が後継者を育てるためには壁になっていることも否めないだろうが、元々あった地縁による地域住民のつながりは重要なポイントのように感じている。

残念ながら平成17年度末で、M町の婦人会（兼

赤十字奉仕団）は解散してしまったが、こうした伝統的な地域組織で支えられてきたボランティア・グループは、特に農村部には多い。行政や社会福祉協議会などの事業担当者は、婦人会の解散後さまざまな場面でそれに代わる団体を探すのに苦慮していた。神戸や新潟の震災などをきっかけに「災害ボランティア」がクローズアップされてきたが、地域の緊急時における迅速な救済行動は、これらの伝統的な地域組織を母体とするものが多い。今までは、まさに地域を支える＜要＞として機能していたといえる。こうした会の解散は地域の変化の象徴ともいえよう。

先ほど触れた、旧来の地域組織の統制力や、半強制力というのは、自由を好む人、あるいは干渉されたくない傾向の強い最近の若者にとっては致命的なものだと思う。30歳代の筆者も然りで、できれば地域の人々に「放っておいてほしい」「関わらなくて済めば…」と思うことが多くある。その一方で、これだけの強いつながりをM町が保てていたこと自体に、筆者は興味を覚える。現在までこういった地域組織が成り立ってきた背景には、何があるのだろうか？

そこには「お互いさま」の意識が関与しているように思えてならない。自分は一人では生きていけない、事によっては人に頼らざるを得ないということが無意識のうちに認識されており、自分も与え、人から与えてもらうことが、地域生活のなかで自然と身についていたのではないか。それが自然と「協力」に向かい、さらに「支える」につながっていたのではないかと思うのである。また、逆に与えられたものに対して「感謝」ができていたように思う。それらの行動や感情が相互に行き交っていて初めて、共同体としての「地域」が成り立つのではないか。

しかし、こういった地域を支えていた「共同意識」が、近年急速に薄れている。年代が若くなるにつれて、この希薄化の現象が顕著に現われていると感じる。自分が楽しめるものには積極的に参加したい、でも役割や責任を担うことや面倒な世話は嫌。権利としての主張はするが、人のことには協力しない。地域住民のそうした言動を見るたびに「地域力」の衰えを感じずにはいられない。常にサービスを受けるという方向での一方通行で、自分が活動の主体になったり、周囲や相手を受け入れたりということが少なくなっていると思うのである。

地域の中での人と人の関わりが、「自分に関係あるもの」と「関係ないもの」というように明確に線引きがされ、割り切った関係へと徐々に変化、移行しているように感じている。ボランティア・グループの課題に、後継者が育たないことがよく取り上げられる。M町においても、新メンバーが加わるグループはなかなか無い。構成員は変わらず、年齢だけが高くなっていく。活動の継承ということ自体がもう難しくなっていると感じるのである。

多くある活動の中で唯一、独居高齢者にお菓子をプレゼントするグループに若い世代が協力してくれることになった。しかし、実際の活動は年代や参加の時期により３グループに分かれて行っている。関係としては良好であるものの、やはり物事の捉え方、取り組み方等様々な場面で違いを感じる。内容は同じでも、１つのグループが分担して活動しているというよりは、それぞれ個別のグループが各々の活動を進めていると言った方が適切だと筆者は思っている。地域福祉事業やボランティア活動での従来のような継承はとても難しく、グループの在り方や活動が個別化されていくように思うのである。

５．共同意識の希薄化と住民を対象とするコミュニティワークの課題
―地域力の再生のために―

「夏休みの居場所づくり」活動で本当に効果があったと思ったのは、大人の活動に中学生が参加してくれたことである。中学生たちが、好きなことへの参加を通じて、自分が楽しむことから、もう一歩先の子育て支援の補助をすることに意識が進んでくれた。地域の人々から「夏休みの居場所」を提供される小学生から、補助的にではあるが「夏

休みの居場所」を提供する側に成長した。中学生たちにどこまで伝わっているかは明確ではないが、将来的に地域を支援していくひとりになっていってくれると嬉しい。こうした、世代から世代に本当に大切な意識の面が連鎖していくことが、地域力を高めていくことにつながらないかと私は思っている。

どの世代の方たちにも共通だが、地域で元気に活動している人たちは苦労も含めて楽しんでおられる。苦労を苦労で終わらせず苦労した後の達成感はもちろん､その真只中で味わう仲間との関係、人からの評価、自分の中の変化等々、今までたくさんのお話を聞かせてもらうことができた。この方たちは活動に関わる中で、そこに表出する様々な影響を楽しんでおられる。一見面倒な事柄にかかわることで､そこから生まれる影響を感じ取り、自分の糧にしていると思うのである。

若い世代を否定するつもりもないし、各世代を一つの物差しで測り比べることもできないと思っている。しかし、コミュニティワークを進めていく際、つながりにくいのはやはり若い世代のように思う。気楽さ、自由などを求めて面倒、責任といったものを敬遠するがため、コミュニティへの入り口でいつも遠巻きに見ているといった感じだろうか。こうした若い世代をいかに繋げていけばよいのか。

子育て支援の取り組みの中で感じたことは、子どもから大人まで大変忙しく暮らしているということである。この「時間」も、地域活動に参加するという面で大切なポイントだと思う。総合学習などで福祉的な活動を授業に取り入れる先生も多い。こうした取り組みのあと必ずと言って良いほどあがってくる課題に、「継続したプログラム」の開発がある。折角の学習の機会も、結局その場限りで終わってしまうのである。子どものうちから､福祉的視野にたてる住人の確保に努めたいが、そうした時間を組んでいくこと自体なかなか難しい。様々な機関が様々な角度から関わるため、子どもも保護者も本当に時間が無い。ボランティアについても大概は２つ３つの活動を掛け持っておられることが多く、調整が難しい。まずは地域の社会資源をもう少しスマートな形にし、似通ったものは抱き合わせで進められることが必要であると思われる。

個のレベルで考えたとき、住民を地域活動に①どのように参加させるのか、②どのようにしたら継続的に関わりあえるか、つながりあえるかが課題になる。①については、世代ごとに考え方、生活スタイルなどが異なるため、少々難しい面もある。初期の段階ではどうしても気楽に、楽しみながらという感覚が入り込んでしまうため、周囲に与える影響や、責任といったものは確認しておく必要がある。子どもの立場、保護者の立場、労働者の立場、支えを必要とする立場……。どの立場に焦点をあてて物事を企画していくか、それぞれの立場の住民が一番気にかけているものを選別できることも重要なことだといえる。強制せず参加を勧めていくためには、こうしたことを踏まえつつ意図的に仕掛けていかねばならないだろう。

②については、参加したことでの成果や、効果をきちんと伝えること。また、第三者に評価してもらうことが効果的ではないかと考えている。活動がその場限りに終わらないようにするためには､その活動の中で「影響を受ける相手」から「与えた相手」、あるいはその逆といった双方に必ず感想や気付きをフィードバックすることが大切だろうと思う。夏休みの居場所づくりを例に挙げると、参加人数や子どもの感想などをボランティアに伝えたり、ボランティアからの子どもの気付きを学校に伝えたりすること。広報や掲示物を作成することで住民に周知し、その反応や評価をボランティアや子どもに返していったことがそれにあたるだろうか。TVなどの影響も大きいので､しっかり活用すべきであろう。良い評価はエンパワーメントにつながり、そこから継続した関わりがもてると期待したい。

いずれにしても、コミュニティ・ワーカーはただ何かを企画するのではなく、こうしたことを念頭におきながら仕掛けを作っていくことが重要ではないかと考える。地域の中でつながるための

きっかけとして事業や活動をおこなうのであり、その企画自体が目標やゴールではない。かなり長期的なスパンにたって事業を作っていかなくてはならないし、一つ一つをフィードバックさせるのは大変労力のいることである。事業効果もすぐには出せないだろう。ただ、この積み重ねがないと、これからの時代「地域力」というものは育っていかないのではないかと、筆者個人は感じている。

それにしても、地域「支援」とはつくづく難しいものだと思う。当事者のニーズを支えるために進めた福祉サービスが、逆に当事者の権利意識を高めただけで、主体性をなくすという弊害をつくったのではないかと思うことも実際ある。組織的に与えてもらえるものには限度があり、逆に与えてもらえないものの方が多いかもしれない。長い将来を見据えて考えれば、もう少し当事者自身が考えて、思考錯誤しなくてはいけないものもあるのではないか。

冒頭で高齢者の福祉資源を挙げたが、どれだけ数が増えても中身が住民の希望に合致していなければきっと満足されることはない。その地域の住民が欲しているものを形にしていかなければ、結局無意味になってしまう。学童保育は日本中にあってM町でも開設されたが、運営はその地域にあった形でなければならない。地域の資源は、地域の人のカラーがでるものであり地域の「人」によってつくりだされるものだと思う。

ある社会福祉協議会の方が、「地域福祉活動では福祉の現場に勤める人ではなく、福祉的な視野をもった地域住民を多く育てることが大切」だと言われたそうである。福祉にお金を提供する人、知恵を提供する人、行動力を提供する人……。具体的にあげればきりがないが、それぞれの立場から、自分の提供できるものを出し、一緒に力を合わせてつくり上げるから「地域」なのだと思う。

コミュニティワークは、その地域の構成員によって形づくられるものだと考える。筆者が子育て支援の活動支援の中で感じ、ワーカーとして進めてきたことは、地域の人が携わってつくられたものがとても役に立っていて、「これだけ元気な地域にあなたは住んでいる」というメッセージを強調して、地域住民に伝えていくことであった。子どもの利益はその保護者にもつながり、地域資源の価値を認識するには格好の機会だったように思う。従来の地域団体のような強制力を使わずにいかに構成員を巻き込んでいくかということ、逆に地域との関係や接点を断ち切らないということ。この部分を押さえつつ、今後の地域支援事業を進められることが重要だと思っている。

註

1）M町の概況においての数字は、同町社会福祉協議会発行『すすめ！ふくし（平成１９年度）』より抜粋したもので、平成１９年１０月１日現在のものである。

参考文献

川村匡由［編著］(2007)『市町村合併と地域福祉－「平成大合併」全国実態調査からみた課題』(京都）ミネルヴァ書房

山内一永［著］(2007)『図解　障害者自立支援法早わかりガイド』日本実業出版社

武石村子育て支援事業推進委員会・しおみとしゆき・あいゆうびい［編］(2006)『地域まるごと子育て支援 「4258人の村」から未来への第一歩』萌文社

杉山千佳［著］(2005)『子育て支援でシャカイが変わる』日本評論社

大豆生田啓友［編著］(2007)『50のキーワードでわかる子育て＆子育てネットワーク』フレーベル館

びーのびーの［編］奥山千鶴子･大豆生田啓友［編集代表］(2003)『親たちが立ち上げた！おやこの広場びーのびーの　―子育て支援NPO』(京都）ミネルヴァ書房

下浦忠治［著］(2007)『放課後の居場所を考える学童保育と「放課後子どもプラン」』岩波書店

中山徹・大阪保育研究所・大阪学童保育連絡協議会［編］(2007)『「放課後子どもプラン」と学童保育　全児童対策事業との一体化・連携を探

る』自治研究社
全国学童保育連絡協議会［編］（2007）『よくわかる放課後子どもプラン』ぎょうせい
NPOブックスタート（2004）『ブックスタート事例集（１）はじめての取り組み』
牟田悌三（1996）『大事なことは、ボランティアで教わった』リヨン社
石川大輔・石川ミカ［監修］（2003）『「お互いさま！」宣言－暮らしの中のバリアフリー』太陽出版

SUMMARY

Experienced Community Work :Program Planning and Resource Development of a Child Care

Sanae　HIRAOKA

This thesis is consideration of the problem for the resident's organizing from the program case where I worked as a community worker.

It is a child care support program that I worked as volunteer coordinator.

The program was planned because the child care support program is more insufficient than the senior citizen program in the region.

The purpose has changed into the first purpose of this program during the execution of the program though it was "Child care support".

As for a new purpose, the resident's organizing became a focus.

In the background, resident's interpersonal relationship is made thin.

Indeed a lot of kinds of people were related to this program.

The problem in the community work in the future is to think about the method of overcoming the gap between generations, the sense of participation to regional activities, and the difference of the participation form.

M町の福祉マップ
へき地保育所
地域子ども教室
A地区
保育所
地域子育て支援センター
子育てサロン（2か所）
学童保育
病院
療養型病棟
グループホーム
訪問介護
居宅介護
デイサービス
福祉作業所（就労継続支援事業B型）
O地区
AY地区
へき地保育所
地域こども教室
認知症専門病院
デイケア
M地区
訪問介護
デイサービス
保育所
放課後居場所づくり

Ⓢ…シルバーサロン